

ケアを担う子ども（ヤングケアラー）についての小平市調査 －具体的な支援方法を探る－

森山 千賀子・増田 修治・山田 裕・市川 奈緒子
牧野 晶哲・午頭 潤子

研究実績の概要

2017年度は小平市教育委員会のご協力のもと、小平市の公立小中学校の教員計722人を対象にケアを担う子ども（ヤングケアラー）についてのアンケートを実施し、小学校320人（68.1%）、中学校175人（73.5%）、計495人（68.5%）の方からの回答があった。ここでは、結果の一部について述べる。

1. 小学校の教員（22.9%）に比べて中学校の教員の方が、家族のケアをしているのではないかと感じる生徒の割合（40.7%）が高く、男女比では、4対6の割合で女性の方が多かった。
2. 児童・生徒がケアをしている相手は、小学校・中学校共に母親ときょうだいが一番多い結果（総数261（複数回答あり）人中、母親107人、きょうだい107人）であった。そのうち、子どもがケアをしている母親の状況は精神疾患が34人と多く、次いでがんや身体障がいも挙げられた。子どもがケアをしているきょうだいの状況では、幼いという理由が64人と圧倒的に多く見られた。
3. 児童・生徒の学校生活への影響については、小学校では、学校教育に対する家庭の理解や協力がなければ成立しない「忘れ物」「遅刻」「宿題をしない」が上位に並んでいた。中学校では、積み重ねの結果でもある「学力」に最も影響が現れると考えられるが、「欠席」や「遅刻」など、結果的な怠学傾向につながる項目の回答が多かった。
4. 相談できる相手や場所があったかを尋ねる質問では、小学校では9割が「いた」と回答していたが、中学校では8割弱にとどまっていた。これは小学校での学級担任制と中学校での教科担任制の違いが、教員の認識や学内外での相談相手や連携のありように、何らかの影響があるのでないかと考えられた。スクールソーシャルワーカーについては、小平市の場合、中学校への配置であることから、小学校での活用には広がっていないことがわかった。